
僕らは友達

カービィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らは友達

【コード】

N0190W

【作者名】

カービィ

【あらすじ】

僕たちは小学校からの友達。

そういう僕たちも気がつけば中学二年生。小学校からの仲が良い友達とはみんな同じ中学。

しかし僕は気がつけば「友達」より「恋愛」と言う言葉を大切にしていたと思った時期もあった。

これらは小学校の友達との残された中学校生活とまだ体験したことのない、甘酸っぱい恋愛物語が始まるうとしてしている。

中学二年生一学期 第一話 準備

桜の舞う季節。

今は今年新しく入ってくる一年生の入学式の準備をしているところ。

僕の名前は荒川大輔あらかわだいすけって言う。

前から思うとなんで、俺たちが入学式の準備をするのか不思議で仕方がなかった。

つと言つても今は体育館の裏側にいる。ここなら誰にも見つからないから、絶好の場所だと思う。

心地良い風が顔全体に当たる。うとうとしていたら後ろから

「だいすけ君」

という声が聞こえた。

後ろを振り返ってみると、そこには佐々木凛ささきりんがいた。

コイツは小学生からの友達でかなり仲がい。

「お前なんているんだ？」

佐々木に聞くと

「それはこっちのセリフ」

と言われデコピンされた。

「痛った〜」

「男なんだからそれぐらい痛くないでしょ」

言われた。

正直言うと痛くないけど。

「どっしているの？」

つと何度も聞いてきた。

「準備すんのダルいから」

つて答えた

そうすると

「ふうん」

とスルーされた。

その後どのくらい沈黙が続いたことか。
気持ち良い風

「だいすけ起きなさい」

つとつるさい声が響いた。

よく考えて見れば、今日から新学期の始まり。しかし08時30分までに登校すれば間に合う。

時計を見ると、まだ06時30分であった。

「つたくなんでこんな早い時間から起きないといけないんだよ。」

こんな早く起こされた俺は、朝から機嫌が悪かった。

しばらくボツとしていると

「だいすけ!!!いつまで寝てるの???今日凜ちゃんに行く約束したんでしょ?」

つと無理矢理布団から出された。

正直言つと結構眠い。

「は〜」

つと大きくため息をした。

これ以上眠くならないように冷たい水で顔を洗いに行った。

しかし眠いもんは眠い。

顔を洗っても眠気がとれず最悪だった。

それに制服での登校だから着替えるのもかなりダルい。

その後は、またボツーとしながら時間が経過していた。

佐々木との約束は08時00分。まだ一時間ある。しかし朝はニュースしかやってないため見たいテレビもなかった。

自分の部屋に行っても退屈。っと思ったら、つい最近買ったラジカセがあった。これを聞きながら時間を潰そうと思った。

気がつくくと07時55分

「やべっ！寝ちゃった。」

佐々木との待ち合わせ場所から10分かかる。

急いで準備して、

「行ってきます」

と言って急いだ

ここから走っておよそ05分以上はかかる。ただ一度も止まらなかったの場合で、信号や疲れたりして歩いたりするので08分はかかる。

そして予想通り08分かかって、待ち合わせ場所についた。
時刻は08時03分を過ぎようとしていた。

佐々木は約束した時間より二分早く来る。そして待ち合わせ時間になっても来ない場合は、先に行っていることもある。

「はあゝ。行っちゃったか」

とため息をつくとき・・・

続く

と疲れたので近くにあつたベンチに腰をかけた。

「はあく疲れた」

と言いまたボツ―とした。

今日も風が強く気持ちが良い。

五分ぐらい座つてそろそろ行こうとした、そのとき

「だ〜れだ？」

と言う声が聞こえ目の前が真つ暗になった。おそらく手らしきもので目を隠しているのだろう。それに誰がやったかは想像がついていた。

「佐々木だな」

と俺は言った

「ピンポン。正解」

「お前いつ来たんだ？」

「今来た」

まさか佐々木が俺より遅れてきたのではないか。

「お前も遅れるときは遅れるんだな」

「そりゃあるよ。人間だからね」

と言い一緒に学校に向かった。

ここから学校まではそこまで遠くない。それを佐々木も分かっていたのか、かなりのんびり歩いた。

それから歩き学校まで残り200mぐらいのところまで

「好きな人いる？」

と聞いてきた。まあ実際いないので

「いない」

と答えた

すると佐々木は

「うそー！いないの。」

とびつくりな表情をした。

そこで

「お前はいるの？」

と聞いてみた。
すると

「好きな人？いるんじゃない？」

とあいまいな答えが返ってきた

そんな話をしていたら学校についた。

「おい荒川」

振り返ってみるとそこには、俺の親友 原口正也はらぐちまさはやがいた。

「俺とお前同じクラスだぜ。」

「まじか。よっしゃー」

とかなりテンションMAXになった。

「大輔君何組？」

と言う声が聞こえた。

誰か見てみると女友達の 山崎夢乃やまざきゆめのがいた。

「お前は何組だ？」

「私は三組だよ」

「おつ、俺と原口と一緒にじゃん」

「やったー」

と喜びスキップしながら友達のところに行った。

「じゃあそろそろ自分のクラスの教室迎え」

先生の声が聞こえ皆教室に向かう。

教室に入るとかなり騒がしい。まあいつものことだけど。

クラスの座席表をみると出席番号順になっていた。おれはあ行なので廊下側。もちろん原口と山崎とはかなり席が遠かった。

それに出席番号順だと男子が固まっていたり、女子が固まってることがやたらと多い。原口の周りには男子が多いが、俺の周りには女子が多い。

「おい。いつまで立ってるんだ。とつとと座れ」

こいつは口が悪く生徒から嫌われているかしわきよしあき柏木義明

すると周りから

「こいつが担任かよ」「最悪だろ」

と感じなささやき声が聞こえた。おそらく柏木には聞こえてはいなかった。

「え、二年三組の担任を持つことになりました、柏木義明です。よろしく。」

まじかこいつが一年間担任かよ。

そう思っている人は少ない。

「じゃあ明日から委員会決めるから何に入りたいか決めておけ。」

そう。委員会はかならず入らなくてはならない。

時刻は09時00分。クラスに行き担任の話が終われば帰っていることになっている。

「おうい、原口一緒に帰ろうぜ」

「おう。いいよ。」

帰り道

「ってかさ担任最悪じゃあん。」

「確かに。柏木とかないよね。」

「うんうん。まじ最悪。」

「あいつが一年間担任だと頭が絶対おかしくなる。」

「その前に学級崩壊になるんじゃないか？」

「まあそれもありえるな」

こんな話をして帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0190w/>

僕らは友達

2011年10月9日14時42分発行